

郷里 遠軽町を拠点に活動するフルートとギターによる夫婦ユニット「ホラネロ」。
主なレパートリーは北海道ゆかりの素材、流水、黒曜石、農業、漁業、ヒグマなどに音素材を求めた“ジオミュージック”や、だれもが口ずさむことのできる“日本のうた”。地元愛を音楽に託し、魅力ある地域づくりを次世代に繋いでいくための活動にも力を注いでいる。

フルートの谷藤万喜子は東京芸術大学大学院室内楽専攻を修了。

本田優一郎は宇多田ヒカル、The Alfee、高見沢俊彦、大黒摩季、ベッキー♪＃、樋口了一らの作品やライブに作編曲、ギターリストとして参加してきた。

これまでにNHK総合「おはよう日本」、「おはよう北海道土曜プラス」、「北海道クローズアップ」、「ほっとニュース北海道」、「オホーツク心の風景」や、NHKBSワールドプレミアムで取り上げられるほか、AIRDO 全便機内オーディオ放送で楽曲が採用された。

CD「ドコマデモ」「FLOWERS」「ヒンメリア」「ヒグマのうた」リリース。

第13代オホーツク観光大使。

1. ヒグマのうた

ヒグマ上腕骨でできた世界にただ一つのヒグマ笛で奏でます。冒頭は、地面を覆う落ち葉を踏む音、熊追いの手拍子やホイホイ！という掛け声で始まります。曲の背景には、知床ウトロ学校の当時4年生のみなさんと地域学習の一環で行なった「音探し遠足」で見つけた音素材が使われています。木の実で作るマラカスやオーシャンドラム、枯れ枝木琴などのほか、地元漁師から譲り受けた鮭箱のドラム音も響かせました。

これらはヒグマにとって冬眠前の栄養源とする食糧であり、巣穴に敷き詰める材料でもあります。時には脅威となるヒグマですが、意外にも山菜やドングリが大好きで、肉を食するのは稀なのだとか。この事は、わたしたちの身近な森が、いかに豊かで生命力があるかを物語っています。

実は、高校の無いウトロ地区では15歳になると親元を離れて高校生活を送ります。学校、父兄の方々は協力し合い、子供たちが巣立つまでに地元の魅力を一つでも多く伝えたい、と熱心に地域学習に取り組んでおられます。ホラネロの“ジオミュージック”が、学校授業を通してその一助を担う事が出来たことは幸せな事でした。

ヒグマ笛の素材である貴重な上腕骨は、ヒグマ研究の

エキスパートで知床財団事務局長の、山中正実氏

からホラネロの活動に共感をいただき、個人的に

譲り受けたものです。コーラスではオホーツク地域の

小中高生の皆さんにご協力いただきました。



2. 雪根開き

早春、山の斜面の木立の根元が真っ先に雪解けし黒土が顔を見せます。北海道ではその現象を「ゆきねびらき」と呼びます。なんという美しい響き！

音素材に選んだイタドリは「痛み取り」と呼ばれることから薬効成分が多く、人々が食べたり湿布して利用してきた生命力溢れる植物です。春、北海道の至る所で姿を見せるオオイタドリは、人間のみならずヒグマの糧にもなるそうです。秋に立派な長さになって立枯れているのを採取し、私が笛にしました。

初演は2017年の秋に、国営滝野すずらん丘陵公園で開催された“音探し遠足”。初夏に人里でも聴くことの出来るアオバトの鳴き声にも似た、温かく懐かしい響きをお楽しみください。



3. いのちの森

こちらもオオイタドリ笛の演奏でお聴きください。

優しげなだけでなく、イキイキとした力強い音色も生かした楽曲を書いてみました。実際、オオイタドリはあまりの繁殖力のため、その存在は疎ましく思われがちですが、意外なほど良い音色を持っています。この笛を知ったのは2016年のヒグマフォーラム in 丸瀬布。主催の「ヒグマの会」の方が「良い音があるから待って」と、わざわざ懇親会を抜け出し、採取してきた新鮮なオオイタドリをその場で笛にして下さったのでした。ぜひ皆さんも作ってみて下さい！

4. ネマガリコーダー

北海道の春の食卓を彩るネマガリダケ(チシマザサ)。やはりこれも冬眠明けのヒグマにとって欠かせない栄養源です。

かつては豆栽培の支柱など、農作業にも使われていたように、秋には長く丈夫な竹に成長します。その竹をくわえて、息を入れれば簡単に音が出せるホイッスルにしました。その名もネマガリコーダー！曲中では水笛としても登場します。

この楽器のお披露目もやはり国営滝野すずらん丘陵公園でした。大人も、子供も、無邪気に“森の音探し”をした風景を音楽で表現するため、落ち葉を踏む足音、枝木琴、丸太ドラムなども使用しています。



5. 北斗七星

地元中学生の、管楽アンサンブルのために書き下ろした

作品を新たに編曲しました。フルート3本とバスフルートのアンサンブルで奏でていますが、サクソアンサンブルなどでも効果的だと思います。

北への道筋を探る指標、北斗七星は北海道民にとってなじみの深い存在。

そしてオオグマ座の一部でもある、ということでここにもクマが登場します！

乙女が大熊に変身・・・？！

ご興味のある方はギリシャ神話も手に取ってみて下さい。

6. 天から送られた手紙

世界で初めて人工雪を発生させた中谷宇吉郎氏が残した言葉「雪は天から送られた手紙である」から着想を得て作曲しました。

雪は高い空の温度や湿度によりさまざまな結晶を形成します。受け取る私たちは「手紙」から地球環境を知るさまざまな手がかりを得られるのかも知れません。

曲中、雪を踏みしめる足音、神秘的な音色を持つチベット起源のシンギング・ボウル、星くずを思わせる“黒曜石”のウィンドチャイムやパーカッションが使われています。2017年冬、雪原と星空の美しいノンノの森（津別町）で初演しました。

7. 摩周湖を渡る風

この作品は弟子屈町公民館開館50周年を記念し作曲されました。

作詞にあたって町民有志の方をお願いしたアンケートの中に、摩周湖で奥様にプロポーズした方のエピソードがありました。

「家族が出来てからも時折訪れる大好きな場所、それが摩周湖です」

一年に四季があるように人生にはいくつかの節目があります。

力強い一歩を踏み出す門出のとき、摩周湖を渡る風が背中を押して、応援してくれますように・・・。

四季折々の風が、私たちの頬を撫でながら、大切な人にメッセージを伝えてくれますように・・・。この曲にはそんな願いが込められています。

あなたの大好きな風景、大切な人を思い描いて歌ってみてください。

コーラスはご縁あって、北見藤女子高等学校吹奏楽局の皆さんにお願いしました。

摩周湖を渡る風

1. ああ夏 君と出かけた摩周の 澄み渡る 青さよ

ささやかで大切な約束 未来へ託す 夏疾風（はやて）

秋の日 午後のもれびの道を ふざけながら 二人 歩いたね

愛しい 君の柔らかな髪 宙（そら）に躍らす つむじ風

ここに いるよ 摩周のブルーは 君の 帰りを いつでも待ってる

風が 描く 僕らの故郷（ふるさと） 青いさざ波 そよ風の軌跡

風よ 吹けよ 季節（とき）を駆け抜けて 過去も 未来も 自由に旅する

風よ 強く 遥か大空へ 愛を 運んで 僕らの伝書鳩になる

2. 冬の夜 君はひとり湖畔で 頬の 流星 数えた

手をつなぎ めくもりを探せば 白く舞い立つ 風花

春の日 旅立つことに決めて 君は そっと 微笑む

カバンを はみ出した思い出 背中を押すのは 雪解風（ゆきげかぜ）

風よ 吹けよ 季節を駆け抜けて 過去も 未来も 自由に旅する

風よ 強く 遥か大空へ 愛を 運んで 僕らの伝書鳩になれ

（間奏）

風よ 吹けよ 季節を駆け抜けて 過去も 未来も 自由に旅する

風よ 強く 遥か大空へ 愛を 伝えて 今は離れても

きつとまた ここで 会えるから

8. アバリ

鮭もまたヒグマの糧であり、海の豊かなミネラルを山岳地帯へ届ける運び屋としても重要な存在。そして、人との関わりが深い生物です。

曲の制作にあたり、私が幼少期を過ごした雄武の漁業協同組合のみなさんにご協力いただき、定置網の手入れ作業や、早朝の漁に同行取材を行いました。

現代ではロープ・網などの消耗品は既製品を買って済ませることも出来ますが、雄武漁協では伝統技術の継承のため、可能な限り手作業で加工・修繕しています。

漁師というと、船の上で荒波にもまれて激しい作業をしている姿を想像しますが、私たちがまず目にしたのは屈強な男たちが、黙々と網針（アバリ）を動かして糸やロープを編む繊細な作業風景でした。私たちはこの裏舞台を多くの方に知っていただくきっかけになればとの想いから、タイトルを「アバリ」にしました。

楽曲では盛運丸が港でエンジンをかける音から始まり、水揚げ時のクレーンや鎖の音がだんだんとリズムに変化し、ビートを刻みます。鐘の音は一部の漁船に義務付けられている号鐘。全曲を通してベース音には東豊丸のエンジン音が使われています。地域学習では地元小学生も漁を体験していると同ったので、中盤で子供の声も取り入れてみました。漁業の発展を祈願して、最後は賑やかに締めくくります！

カムイミンタラ組曲

9. カムイワッカ

北海道には数多くのアイヌ語由来の地名が残っています。

この曲は、知床観光に行った際に立ち寄った秘湯“カムイワッカ湯の滝”の思い出として作られました。ここはヒグマも生息する自然豊かな山中にあり、緩やかな傾斜の岩盤を流れ落ちる珍しい温泉。長く入っていると肌がしびれる事もある、強酸性の湯です。カムイとは“神”を意味するアイヌ語ですが、カムイ〇〇のように呼ばれる地域は、ヒグマが多く出没したり、人を寄せ付けない険しい地形や活火山があり、まるで先人が危険を教えているかのようです。メインタイトルのカムイミンタラとは「神々が遊ぶ庭」を意味します。アイヌの人々はヒグマを神の化身と考え、その生息地を畏敬の念をもってこう呼んだのでしょう。

10. キムンカムイ

“山（キムン）の神（カムイ）”とはアイヌの人々の生活にとって欠かすことの出来ない食糧、薬、祈りの対象でもあるヒグマを意味します。

昨年、私たちの手元に対のヒグマ上腕骨が届きました。知床財団によって観察されてきたワキイチという若い雄熊のもので、母熊のもとを巣立って間もなく人里に出てきたため、やむを得ず駆除されたそうです。

この骨を笛にする過程で茹でたところ、思いがけない芳醇な匂いがしました。イクラです！もしかすると鮭を大量に食べて冬眠に備えていたのでしょうか。懸命に生きようとした証を濃厚なスープから感じ取った瞬間でした。

ヒグマはあなたにとってどのような存在でしょうか。

CD「ヒグマのうた」を通して、北海道にみなぎる大自然のパワーと、地元愛に溢れる人々の熱い思いをお届けできましたら幸いです。

文：ホラネロ 谷藤万喜子（ヒグマの会会員）

ヒグマ笛、ネマガリコーダー製作：谷藤紅山氏（新都山流尺八竹琳軒大師範）

